

「慰安婦」と出会った 女子大生たち



〔講師〕 石川康宏 (神戸女学院大学教授)

1 平和・自由・平等をめざす 世界の流れ

7月に参議院選挙が行なわれました。日本の政治が、なかなか期待通りに変化していかないと嘆かれている方もあるかもしれません。しかし100年単位の大きな流れで見れば、人間社会の変化は劇的です。

20世紀の前半は、大国による世界の植民地分割が頂点に達する時期ですが、第二次世界大戦後には、アジアから植民地支配体制が崩れます。その後は米ソの覇権争いがつづきますが、1991年のソ連崩壊で冷戦は終わり、2003年からのイラク戦争を転機にアメリカの求心力も急速に低下しました。

今日では、かつての植民地地域が世界政治の最前線に躍り出て、大国の横暴を許さない新しい世界秩序づくりに向かっています。今年5月のNPT（核拡散防止条約）再検討会議でも、核兵器廃絶に向かうという最終文書が、核保有国をふくむ全会一致で採択されました。

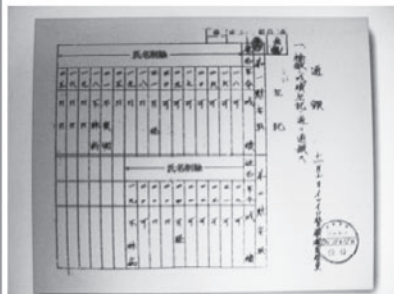
こういう変化に目をやれば、憲法9条を変えて、これから「戦争のできる国づくり」をしようとするのがいかに時代錯誤の動きであるかがよくわかります。

2 「慰安婦」問題入門

学生たちとの「慰安婦」問題についての学びを紹介します。まずは問題自体についてです。かつてのアジア太平洋戦争で、日本政府と軍は兵士たちの性欲を満たすことを目的にたくさんの女性を監禁し、数カ月から数年にわたるレイプを繰り返しました。そのための施設が「慰安

資料 A

軍でなく民間業者がやったこと？ 4



所」(レイプセンター)で、その被害者が「慰安婦」(セクシャルスレイプ)です。軍の資料で確認できる最初の「慰安所」は1932年に上海でつくられたものです。その後、侵略地域の拡大に応じて「慰安所」の数は増え、現在わかっているだけで400数十カ所。「慰安婦」の数は、数万から10数万となりました。

資料Aにあるように「慰安婦」には10代半ばの女性も多くいました。また、朝鮮人被害者の場合には、いと年齢の数え方が違うため、実際はこの数字より1〜2歳若くなります。1日に60人もの兵士にレイプされ、自分で足が閉じられなくなったとか、幼かったので性器をはさみで切られてレイプされたなどの証言もあります。

資料Bは連合軍によって発見された「慰安婦」たちです。右端の朴永心パクヨンシムさんは日本兵の子どもを身ごもっています。資料C、Dは「慰安所」の運営に日本軍が直接関与していたことを示すものです。実際、日本政府は1992年に「慰安所」の設置、「慰安婦」募集者の人選、「慰安」施設の築造・増強、「慰安所」の経営・監督、「慰安所・慰安婦」の衛生管理、「慰安所」関係者への身分証明書の発給などに「政府の関与」があったことを認めています。

戦争が終わったときに「慰安婦」の多くは殺されるか、その場に捨てられることになりました。やっとの思いで故国に帰っても、カラダが壊され、レイプによるトラウマに苦しみ、「日本兵の相手をさせられた女」という偏見と差別の中で長く戦後を生きずにおれなくなります。1945年に戦争が終わったというのは、

加害国の市民が安易に口にしていることではありません。彼女たちの「戦争」は、いまもつづいているのです。

資料B

兵士の性欲「処理」を目的に 4



資料C

軍でなく民間業者がやったこと? 2



資料D

軍でなく民間業者がやったこと? 6



3 国際的な批判と国内の取り組み

「慰安所」等でのレイプは、60年以上も前の話ですが、それについて誠実な謝罪や賠償をしない現在の政府をつくっているのは現代に生きる私たちです。これは昔の問題などではありません。

1991年に韓国の元「慰安婦」キムハクスン金学順さんが日本政府に賠償と謝罪を求める訴えを起し、それをきっかけとした政府の調査によって、1993年には「お詫びと反省」を述べる「河野談話」が示されます。

しかし、この談話にもかかわらず、その後、日本政府の首脳からは「商売女だ」「河野談話は間違いだ」という発言が繰り返され、学校の教科書からは「慰安婦」問題の記述が消されていきます。そうした流れの頂点に立ったのが2007年、安倍首相（当時）による「狭義の強制はなかった」「謝罪の必要はない」との暴言でした。

これは世界的な大問題となり、アメリカ下院さえもが日本政府に反省と謝罪を求める決議を可決しました。カナダ下院、欧州議会も同様の決議をあげ、つづいて2008年にはフィリピン下院、韓国国会、台湾立法院が決議をあげていきます。こうした国際世論の背後にあったのは戦時性暴力を根絶しようという取り組みの広がりです。そのためには過去の犯罪に対する不処罰の連鎖を断ち切る必要がある。そういう角度から「慰安婦」問題はあらためて世界的に注目をあびているのです。

こうした力に励まされて、現在、日本各地で地方議会から国に対して問題の誠実な解決を求める意見書をあげる取り組

みが行なわれています。2008年3月の宝塚市議会をはじめ、今年の7月末現在で29自治体が可決しています。これを大きく広げることが急務です。

4 2004年度3年ゼミ以降の学び

私が「慰安婦」問題を3・4年生ゼミのテーマとしたのは2004年からのことです。きっかけは、韓国を訪れた卒業旅行の自由時間に私が「慰安婦」被害者たちが暮らす「ナムムの家」を訪ねたことでした。すでによく知っているとの思いで訪ねた「日本軍『慰安婦』歴史館」で、私は大きなショックを受けました。この問題はこれほどまでに深刻に人々の人生を破壊するものだったのか。その一人ひとりの人生にまで、私は思いを届かせることができずにいたのです。これが直接のきっかけでした。

大学の授業は1コマ90分ですが、私のゼミは月曜の午後3時から8時まで、毎週5時間となっています。非常にハードなゼミですが、学生たちはそれをよく知ったうえで「大学時代にしっかり学んだものを残したい」「韓国のことが好きだから」「歴史問題は大事な問題なので」など、様々な動機をもって集まります。

ゼミでは最初に、正反対の意見に目を通します。ゼミがスタートする前の春休みに、日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会『歴史教科書への疑問』と不破哲三『歴史教科書と日本の戦争』の要約を宿題に出すといった具合です。学生は混乱しますが、だからこそ自分で事実を確かめることの大切さを知るのです。

資料 E

⑱2010年第7世代の東京学習ツアー 1



資料 F

2010年第7世代の東京学習ツアー 6



資料 G

何をしてきたか 「歴史館」に学ぶ



資料 H

何をしてきたか 水曜集会での連帯 2



ゼミの議論で、私は自分の意見を強く主張しません。そうしても「先生はそういうけど、本当のところはどうなんだろう」—そういう疑問が消えることはないからです。学びの主体は学生です。

映像を見ることにも時間をかけています。無言の死体が転がる戦場の恐ろしさ、「慰安婦」被害者自身の痛切な叫び、苦悩に満ちた加害兵士の懺悔など、できごとの重みを具体的な人間の営みとして、できるだけリアルに知るためです。「大東亜戦争は正義の戦争だった」とする、日本会議・英霊にこたえる会『私たちは忘れない』や、靖国神社『みたまを継ぐもの』も見ています。

教室の外でも学びます。東京学習ツア

ーと称する1泊旅行では「慰安婦」問題専門の資料館である「女たちの戦争と平和資料館」、傷痍軍人の戦後の苦悩を記録した「しょうけい館」、明治以降のすべての戦争を正しかったとする靖国神社と「遊就館」等を見学しています（資料 E、F）。これもまったく立場の違う資料館です。

3年生の夏休みには3泊4日で韓国を訪れます。「ナヌムの家」で証言を聞き、ハルモニ（おばあさん）と交流し、「日本軍『慰安婦』歴史館」に学びます（資料 G）。ハルモニたちが日本大使館に抗議する「水曜集会」にも足を運び（資料 H）、日本からの独立を叫んだ朝鮮人を投獄し、拷問し、殺した西大門刑務所な

ども見学します。

ある学生は、「ナムムの家」でハルモニの手をとったとき「つないだ手が、すごいちっちゃかった。その瞬間、この人がされたこと、どんな屈辱やったんやろって…」と感じています。体験は、事柄を理解する大変に重要な素材となります。

5 学生たちの社会に訴える取り組み

韓国から帰国したのちに、学生たちはそれを多くの人に伝える取り組みを行っています。「ハルモニに会って良いことをした」という自己満足に陥ってはならない。それではハルモニの苦痛は消え去らない。

そういう思いで、これまで4冊の本をつくってきました。『ハルモニからの宿題』（冬弓舎、2005年）、『「慰安婦」と出会った女子大生たち』（新日本出版社、2006年）、『「慰安婦」と心はひとつ 女子大生はたたかう』（かもがわ出版、2007年）、『女子大生と学ぼう「慰安婦」問題』（日本機関紙出版センター、2008年）です。『「慰安婦」と出会った女子大生たち』は韓国の市民運動家たちによって翻訳され、韓国の若い女性によって読んでメールを届けてくれたこともあります。

本の内容については中学生にもわかるようにと、資料I、Jのように、写真、絵、マンガを使うなどの工夫をしています。大学の中で報告会を開いたり（資料K）、学内にハルモニを招いたり（資料L）、また学外でも多い年には年間30回ほどの講演活動を行なっています（資料M）。就職状況が悪くなるなかで学生

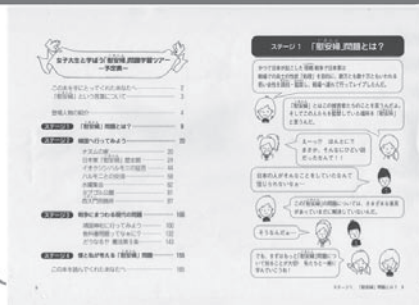
資料I

何をしてきたか 中学生にもわかるよう



資料J

2人の女子大生が2人の中学生に



資料K

⑩何をしてきたか 学内で知らせる



たちの苦労は増していますが、いまでもこうした努力は続けられています。

講演先では「あなたたち若いのにエライね」などといわれることがあるようですが、これに対しては「エラクなどない、当たり前なこと」「あなたたち大人もも

資料L

何をしてきたか 学内で証言集会



資料M

⑰何をしてきたか 学外で知らせる



っと動いてほしい」という正直な感想も口にしていきます。

6 2010年度の学び

今年も6月末に東京学習ツアーを行ないました。その直後のゼミでは「『慰安婦』もかわいそうだけれど、深刻な障害を負った日本兵もかわいそう」というところから話のはじまりました。しかし、戦争の性格、日本政府と日本兵の関係、日本政府と「慰安婦」の関係、日本の女性の責任、戦後の軍人恩給と加害責任など、様々な角度から意見が出され、最後にはある学生が「いかにひどい傷を負ったとはいえ、『慰安婦』と日本兵を同列におくことはできない」と述べていまし

た。

9月には韓国へ行きますが、その前の「夏休み」に学生たちは親しい人との様々な摩擦を体験します。「なぜ『慰安婦』問題なの?」「大東亜戦争は正しかった」「朝鮮になど学ぶものはない」という意見が家庭の中にあることも珍しくありません。そのつらさの中で、学生たちは互いに連絡を取り、自分たちの学んだことや考えたことを確かめ合って進みます。

「慰安婦」問題をゼミで取り上げて7年目ですが、7年のあいだにはいろいろなことがあり、学年ごとの色合いも違います。ふりかえって考えさせられることの中には「教え込み」が強いと余計な混乱が起こるということです。必要なのは「教え込み」ではなく、「自分で学び、考える」ことを支え、導いていくことです。

学生たちには学びの分量に応じた直線的な成長があるわけではありません。「右翼はいやだけれど、左翼にもなりたくない」といった「常識」の壁にもぶつかりますし、身近な人からの批判の声には困惑します。また自分の中にある無自覚の「愛国心」にも向きあわねばなりません。「どうしてこんなシンドイことを考えなければいけないの」—そういう気持ちになることも珍しくないのです。しかし、それを自分の意志で乗り越えていくわけです。

最初に述べたように世界は大きく変化しています。その変化にふさわしい日本社会の進歩をつくるためにお互いに努力し合いたいと思います。みなさんの取り組みの発展に期待しています。

(文責：知識明子)